令和元年度 第１回近江の地場産業および近江の地場産品の振興に関する施策推進協議会における主な意見

日時　令和元年８月５日（月）
１０:００～１１:３０
場所　滋賀県庁 北新館　中会議室

１　議題
（１）平成３０年度近江の地場産業および近江の地場産品の振興に関する施策の実施状況について
（２）話題提供「販路開発について」
（３）その他

２　参加者
別紙参照。

３　主な意見
議題（１）平成３０年度近江の地場産業および近江の地場産品の振興に関する施策の実施状況について

【各産地の現状について】
・信楽が舞台のスカーレットは女性が主役であり、女性陶芸家など女性目線での消費を検討したい。潜在的な需要や把握できてない需要もあると思われる。また、販売の形態も変化してきており、インターネットで直接消費者とやりとりできる時代になってきている。
・信楽の陶器まつりなどのイベントでは、駐車場・宿泊施設不足の問題などが毎回常態化している。逆に評判を落としかねないので、おもてなしの方法とイベントの分散などの検討が必要。
・今までの見せ方（商品そのものや、ショーなど）が大きく変わってきている。ものづくりの現場を見せる・体感できるなど、その裏にある考え方（ストーリー）をすべて見せることで、よりダイレクトに消費者に訴求していくことが必要になってきているのでは。
・８月の開催なので、現状で事業の推進での懸案事項などを挙げてもらえると、委員から意見を出して施策に活かせるのでは。
・農水関係の事業が多い。この会議に出席してもらえる体制の検討も必要では。資料の事前送付などの改革も進めて欲しい。
・経営基盤の強化のためには売上げが上がらないとダメ。短期的、長期的な視点での事業はどちらも大事なので、それぞれ実施してほしい。
・九谷などでは昔ながらの卸７０％では苦しくなってきている。良品をある程度量産できる体制が、これらかの時代には必要では。

・各地の美術館では美術系の展示ではなく、生活に結び付いた展示も増えてきている。
・昔ながら（従来）の地場産業についても、温存、横ばいでいけるように施策を講じて欲しい。
・琵琶湖を中心とした漁業は規模も生産量も少ないが、琵琶湖特有の魚が多いため潜在的な強みがある。しかし、需要があれば作ればいいというわけではなく自然相手なので、それに伴った漁獲の調整が困難。時代の流れでネットによる直接販売も普及してきたが、一方で将来的には産地市場がなくなると、現場で目利きによる評価をされていない商品が流通することになり、悪いものが流通した際に「これが琵琶湖の魚か」と思われるとよくない。時代の流れで難しいが、どこかで品質を担保することが必要では。

議題（２）話題提供「販路開発について」

・草津の近鉄で地場産品のブースを設置する話があるが、近鉄では全体を取りまとめる担当者がいない。また、バイヤーというものがなくってきている。
・旬の先取りが大事。
・近江上布や長浜縮緬では海外へのPRを行っている。海外への展開も大事であるが、それを支える安定した体制も必要で、海外向けと日常使用向けの両輪をうまく回していく必要がある。古くからの技術・伝統的な技術をPRするのはある程度限界があるため、若者を取り入れながらライフスタイルを提案することも効果的。そのためには若い作り手が興味を持つ工房やそれを支援する体制が必要。
・今の若い人（30代より若い世代？）の価値観の例として、①信楽を知らない、②仏壇そのものを知らない、③陶磁器が高級品という概念がない、④100円ショップでほぼすべて揃う。こういった世代に対して、どのように価値観を見出していくか。
・リデザイン、若者の価値観に合わせる、いかに売れるものを効率的に作るか（小ロット量産）、生産者にどのような仕組みで利益をもたらすか、などが課題。
・今年は信楽で滋賀博をやる、くらいのつもりでいろいろなものをやっていただくくらいの。いろいろなものと競合してもらうのもチャンス。